

## 「親和」と留学生

——太宰治『惜別』を中心に——

林 麗 婷

はじめに

太宰治『惜別』は一九四五年二月に完成し、九月、朝日新聞社より出版された。作者が「あとがき」で記しているように、「内閣情報局と文学報国会との依頼で書きすすめた」小説である。一九四三年一月、日本は東京で「大東亜会議」を主催して、五大原則からなる「大東亜共同宣言」を採択した。『惜別』はその中の「独立親和」原則を小説化した作品であり、国策色のある小説である。先行研究で注目を集めたのは、一つは太宰の魯迅受容・中国理解に関する問題である<sup>①</sup>。もう一つは小説の執筆経緯及び太宰の思想や日本観に関する問題である<sup>②</sup>。また、作品分析を通して、『惜別』の批評性を論じるものも見られる<sup>③</sup>。

ところで、太宰は一九四四年春ごろ「『惜別』の意図」を執筆し

た<sup>④</sup>。「後年の魯迅の事には一さい触れず、ただ純情多感の若い一清国留学生としての「周さん」を描くつもりであります」と述べている。「留学生」と「独立親和」原則はどのような関係性を持っているのか。「清国留学生」としての「周さん」はいかに描かれているのかなどの問題については、まだ検討の余地がある。そこで、本稿では、まず、太平洋戦争前後、留学生に関する記事に注目して、第二次世界大戦後期、日本政府が留学生対策を見直して、「留学生」と日本人の「親和」を意図したことを明らかにしたい。次に、『惜別』に描かれる周さんと同時代の留学生の言説を対照しつつ、「周さん」を留学生群の一人として描く太宰の描き方を検証する。そして、作中人物、とりわけ「津田憲治」の言論に注目して、明治末期日本政府の対留学生方針及びそれによって引き起こされた騒動を関連づけて、「津田憲治」の言論の意味を分析する。最後に、『惜別』

で語られる親和物語の破綻に着目して、小説の批評性を論じたい。

### 一、大東亜共栄圏と留学生対策

一九三七年七月七日、盧溝橋事件が勃発して、中日両国が全面戦争に突入し、中国人日本留学生が一斉に帰国した。しかし、留学生は全く姿を消したわけではない。例えば、一九四一年二月二四日の「東京朝日新聞」には、「共栄圏の春は留学生から」という記事が掲載されている。そこには、盧溝橋事件により中国人留学生は大勢帰国したものの、「治安の恢復とともに日本のいはゆる東亜共栄圏を確立せんとする真意が徹底した結果、一昨年あたりからほつほつ増し始め、現在の数は約千二百名」とあり、また「満州国」からの留学生は毎年二百名で、「今年」は少し増えて二百四十名の予定であると記されている。

一九三二年三月の成立以降、「満州国」は留学生を派遣し始めた。一九三九年八月三十一日、「満州国」政府が「留学生規程」(改正)<sup>⑤</sup>を公布した。留学生の資格、留学試験の内容、日本に渡る手続きや留学補助費等に関する規程である。「留学先は明記されていないにもかかわらず、日本語の筆記試験に関する言及があるなど、留学先として、日本が無条件に想定されている性格のものである」<sup>⑥</sup>とする河路由佳の指摘が適切であろう。中華民国では、盧溝橋事件後、一九

三七年一二月に北平(北京)で成立した「中華民国臨時政府」と一九三八年三月に南京で樹立された「中華民国維新政府」の指導下に留学生派遣が行われるようになり、両政権はそれぞれ留学生派遣に関する「規程」や「条例」を公布した。一九四〇年、両政権が日本政府の意向で統一され、汪兆銘政権の「中華民国国民政府」(通称南京国民政府)が成立した。一九四一年五月、南京国民政府教育部が「修正国外留学規程」を公布した。

「共栄圏の春は留学生から」の見出しが示すように、留学生は日本の大東亜共栄圏建設の柱に位置づけられるようになった。例えば、一九四二年七月七日の「読売新聞」に「日本精神を教育、大東亜留日学生会、十日に発会式」の記事がある。「共栄圏の若き学徒に日本精神を植多つけ共栄圏建設の新指導者をつくりあげよう」と文部省の外郭団体として財団法人「大東亜留日学生会」を設立し、留学生の管理を強めようとする動きである。

「毎日新聞」一九四三年九月二日の記事、「留日学生に大御心／岡部文相・輔導方針奏上」には、「今や時局重大なる秋に当たり有為なる留学生をして克くわが国体並に文化の神髄を把握せしめ、わが国青年学徒と深く相結んで世界に冠絶する新しき大東亜建設の大业に邁進せしむるため大東亜省と連絡して懇篤なる輔導と教育を施すことは正に刻下の急務なりと考へる」とある。さらに、同紙面に

情報局によって定められた「共栄圏建設の指導者を養成／実施要領」が全文掲載された。すなわち、留学生の選抜から卒業後の進路までは大東亜省が行うこと、教育部面は文部省が担当すること、留学生に対しては日本人学生と同様に教育し、同宿生活によって日本人学生との精神的一体化を図ること、国内各層にも留学生に対する理解を深め協力を求めることなどが記されている。

また、一九四三年二月、大東亜省は「南方特別留学生」招聘事業を発足し、一九四三年から一九四四年にかけてフィリピン、マライ、スマトラ、ジャワ、ビルマ、セレベス、南ボルネオ、北ボルネオ、セラム、タイから合計二〇五名の留学生を招いた。<sup>⑦</sup>

一九四四年一月一日から、「読売新聞」はコラム「家庭共栄圏」を約一週間連載した。「防訓も家族と一緒／泰のアブ君を世話する外山氏」、「日本語に打込む／勉強熱心な中国の楊君」、「寮で味へぬ生活／わが子同様・満州の閩さん」などの見出しが示すように、各国からの留学生が日本人家庭に溶け込んでいる様子が描かれている。「家庭共栄圏」の言葉に相当な政治的意味が込められていることはいうまでもない。

以上から、大東亜共栄圏建設の一環として、従来整えられていなかった留学生対策が見直された。文部省と大東亜省が連携し、留學生事業全般を両省の指導の下に置くようになった。留學生の生活を

改善するとともに彼らの物心両面の管理を強めようとしている。また、外郭団体が積極的な協力的姿勢を見せること、官民協力を求め、留學生と日本人との「親和」を訴えていることも明らかである。「家庭共栄圏」はまさにこのような親和物語を作ろうとしている。

## 二、中国人留學生のありよう——『惜別』の場合

『惜別』は「独立親和」を小説化した作品であるが、直接第二次世界大戦中の留學生が描かれているわけではない。初刊時には、「医学徒の頃の魯迅」のサブタイトルが付けられていたように、同作には魯迅をモデルにした明治末期の中国人留學生が描き込まれている。大宰治は『惜別』を書くために、実藤恵秀が一九四三年から一九四四年にかけて「東亜文化圏」に連載した「留日学生史談」を読んだ事実が明らかになっている。<sup>⑧</sup>

実藤は「東亜文化圏」第二巻第一〇号（一九四三・一〇）、第一回の「はしがき」で、「東亜文化圏」編集局から「留日学生史を書いては」と提案された旨を述べている。これは偶然というより、「東亜文化圏」がこの時期留學生問題に相当関心を寄せていたことを反映している。この号の「巻頭言」では、「留學生問題と我文化体制に就きて」の題で、留學生教育における教材問題が取り扱われている。それより前の第二巻第五号（一九四三・五）では「留學

生対策に関して大東亜大臣に進言す」の文章が巻頭を飾った。そこでは「我国における留学生問題の経験は既に長いものがある、日本が日露戦役に捷つたことは、アジア諸民族の光明となり、亜細亜の復興を志す東亜の青年が挙つて我国を目指し来つた時より全亜細亜諸国青年の遊学を見るに至つて居る」が、留学生を監督しないと、「放縱なる生活を続け、引いては毎日、反日の言動に走るものあり」と主張されている。また、第二巻第八号（一九四三・八）では、野村瑞峯の「大東亜戦下の留日学生のことども」が掲載され、日本が大東亜の核心であることを留学生に認識させるべく、留学生の教育と錬成が必要であることが語られた。そのような背景で実藤の連載が始まったのである。

五十嵐康夫がすでに指摘したように、「惜別」では、太宰は実藤の著作を「巧みに引用模倣し」ながら、『留学生活心得書』や『留學生自治用訓』に記載されている内容を小説に鏤めた<sup>⑨</sup>。そこには、小説のリアリティーを増すのみならず、周さんを清末の留學生群の一人として描く太宰の意図が窺えよう。

『惜別』は東北地方某村の老医師「私」の手記の形を採っている。「医学徒の頃の魯迅」<sup>⑩</sup>周さんは、「私」と同じ仙台医専に在学している。ある日偶然に松島で出会った周さんは自分の生い立ちや悩み、日本に來た経緯、医学救国の抱負などを饒舌に「私」に聞かせる。

「私」は「私」なりの問題を抱えながら、周さんを観察する人物として設定されている。

周さんは「明治三十五年、二十二歳の二月、無事横浜に上陸して、一九〇六年仙台を去る。それは魯迅の経歴に重なっている。ただし、魯迅は仙台を去って東京に戻って、文芸活動を行う。『惜別』では、周さんは「僕はすぐ医学をやめて帰国します」という。魯迅が日本に滞在していた間に、日露戦争（一九〇四～一九〇五）が起こつた。それより前の一九〇三年、在日留學生が帝政ロシアの中国侵略に抗議するため、「拒俄義勇隊」を組織したことがある。

「浙江潮」<sup>⑪</sup>第四期（一九〇三・五）「留學生記事」のコラムには、中国東北三省がロシアに侵略される危機に瀕したため、留日學生が東京錦輝館で集會を開き、「拒俄義勇隊」を組織して、祖国のために我が身を惜しまず尽力すべきだと呼びかけたという事実が記されている。魯迅は「自樹」の筆名で、「浙江潮」第五期（一九〇三・六）及び第九期（一九〇三・一一）に「スバルタの魂」<sup>⑫</sup>を寄せた。スバルタの國民が国を守るために勇ましく戦う様子が描かれた作品である。それは当時の進歩的知識人が国を滅亡の危機から守るために呼びかけた「全民皆兵」の主張と呼応している。

日露戦争に至って、留學生たちは何を考えていたのだろうか。敵安生が当時の留學生の心理を分析し、三つの層に分けた。黄色人種

キャブテン日本の善戦に巻き起こった興奮を第一の反応とし、つづ  
く羨望と、それと相表裏する焦りとやや持ち直した自信とが複雑に  
まざりあつた感情を第二の層、日本の戦勝によって生まれた新たな  
心配、日本への警戒の念を第三の層とする。<sup>12)</sup>

留学生の回想記では、「一九〇四年二月、日露戦争が始まった頃、  
人々は帝政ロシアに憎しみを抱いているため、日本に同情を寄せた。  
日本が勝つたと聞いて皆喜んでゐた」<sup>13)</sup>と呉玉章が振り返っている。

景梅九は日露戦争期に経験したことを後年の自伝『罪案』<sup>14)</sup>の中に綴  
つた。「出征軍人を送る家族や市民がいつも一枚の白いのぼりをか  
かけ、上に「祈戦死」(戦死を祈る)の三つの大文字を書いてゐた、  
「私の体中の血が沸き返り、その三つの文字に吹き付けるようであ  
つた」と記した。

魯迅の日露戦争に対する態度は明らかでない。沈黙氏は回想記の  
中で、日本を声援している留学生と比べて、魯迅は日本に警戒心を  
抱いてゐたと述べた。中国の近隣である日本が、一旦ロシアに勝ち  
東アジアを牛耳つたら、中国はもつとひどい目に遭つと魯迅は考え  
てゐたという。<sup>16)</sup>ただし、その信憑性は留保すべきだと嚴安生はす  
でに指摘してゐた。<sup>17)</sup>

一方、『惜別』で、周さんは、「自分はこの戦争も支那の無力が基  
因であり、これではまるで支那の独立保全のために日本に戦争

してもらつてゐるやうにも見えて、考へ様に依つては、支那にとつ  
てはまことに不面目な戦争ではあるまいか」と語つた。ここでは、  
周さんが日本に味方する呉玉章や景梅九に近い存在のように描かれ  
る。しかし、考えは三人三様だ。呉玉章は帝政ロシアに対する憎し  
みから日本に同情を寄せ、景梅九は日本国民の愛国心に圧倒された。  
周さんは日露戦争を「支那の独立保全のために日本に戦争してもら  
つてゐるやうにも見え」と理解している。

日本がロシアに勝つたことは周さんに大きな衝撃を与えた。周さ  
んが「いままでの自分の日本観に重大な訂正を加へるに到つたや  
う」だと「私」は述べた。しかし、『惜別』では、まもなく次のよ  
うなエピソードが綴られる。

周さんは、この学年がすんで夏休みになつたら、東京へ行き、  
同胞の留日学生たちに、周さんの発見した神の国の清潔直截の  
一元哲学を教へて啓発してやるのだと意気込んでゐたが、(略)  
九月、新学年の開始と共に、また周さんのなつかしい顔を仙台  
で見た時、私は、おや? と思つた。

また、「私」は周さんに「忠の二元論」の反響を尋ねると、周さ  
んはあやふやで「僕には、もうわからなくなりました」と答えた。

この箇所は今まであまり注目されなかつたが、「私」は「明治三  
十七年の秋」の入学で、周さんと同級だったため、「この学年がす

んで夏休みになつた」というのは一九〇五年と推定できる。

そして、大雪の夜、周さんは「私」の下宿を訪ねた。「いまは黄興の一派と孫文の一派の握手もいよいよ実現せられて、中国革命同盟会が成立し、留学生の大半はこの同盟会の黨員で、あの人たちの話を聞くと、支那の革命がいまにも達成せられさうな様子」だという。

当時の留学生の状況を見てみよう。俞辛焯が『孫文の革命運動と日本』（一九八九・四、六興出版）の中で、「八月三日、黄興・宋教仁・張継・程家樑らが中心になって麹町区富士見楼で東京中国留学生の孫文歓迎大会が開かれた。大会には一〇〇〇人以上の留学生が出席し、空前の盛況であつた。孫文は民族主義を中心とした演説を行い、青年学生らの共鳴心を呼び起こした」（一〇二頁）と紹介している。これに関しては、呉玉章や景梅九の回想記でも裏付けられる。さらに、中国同盟会が東京で結成され、「同盟会宣言」が発表された。翌年の一九〇六年、孫文は「同盟会宣言」の「四綱」を正式に「三民主義」と定めた。

以上の事実から、周さんは夏休みに東京で中国同盟会の成立を見聞きしたと推定できる。しかも、周さんはそれに対し、かなりの衝撃を受けている。『惜別』では、「明治三十七年」、三民主義がすでに語られている。二人が松島で出会ったその夜、周さんは義和団の

乱によって民衆が清国の無能を看破し、海外に亡命していた孫文が三民主義を完成したと「私」に言ったことがある。また、「私」は留学生との交際について助言を求めて藤野先生の研究室を訪ねた。そこで、藤野先生は「あの三民主義といふのも、民族の自決、いや、民族の自発、とでもいふやうなところに根柢を置いてゐるのではないか」と語った。一九〇六年成立の三民主義を一九〇四年に語ることは不自然である。

実際のところ、魯迅は一九二六年三月に発表した「中山先生逝去後一周年」<sup>18</sup>の中で、孫文を「永遠たる革命者」と高く評価した。しかし、魯迅が直接に三民主義を語った資料は見当たらない。丸山昇は魯迅の日露戦争前後の思想を「全体としては、まだ混沌のうちにある」<sup>19</sup>と指摘している。太宰が「あとがき」で言及した小田巖夫『魯迅伝』（一九四一・三、筑摩書房）と竹内好『魯迅』（一九四四・一二、日本評論社）は魯迅を三民主義と関連付けて論じなかつた。

一方、『惜別』では、周さんは他の留学生と馴染めないという「不幸な宿命」を抱えながら、「僕は、ただ僕の一すちに信じてゐる三民主義を、わかり易く民衆に教へて、民族の自覚をうながしてやりたい」と告白している。太宰は虚構を通して周さんが三民主義を信奉するありさまを描いている。

周さんは「神の国の清潔直截の一元哲学」を東京の同胞に伝えようとしたところ、かえって同盟会の動きや留学生の革命への情熱に戸惑った。しかし、彼は決して三民主義や留学生の行動を否定してはいない。むしろ、「忠義の二元論」の挫折を余儀なくされて、三民主義を信奉する他の留学生と同調するようになった。

もう一つ注意しなければならないことがある。周さんは仙台に帰った後、東京の状況を聞かれると、「戦争の講和条件が気にいらな」と言つて、東京市民は殺気立つて諸方で悲憤の演説会を開いて、ひどく不穏な形勢で、いまに、帝都に戒厳令が施行せられるだらうとか何とか、そんな噂さへありました。どうも、東京の人の愛国心は無邪気すぎます」と答えた。これはいわゆる日比谷焼打ち騒動である。それより前に、「私」の下宿先の一〇歳の娘が戦地の叔父に送る慰問文を周さんに直してもらう場面がある。周さんはその手紙に触発されて、日本人の「忠の精神」を賞讃した。そのこともあつて、日比谷焼打ち騒動に戸惑いを覚えたのに違いない。周さんは留学生としてこの騒動を眺めたわけだが、「無邪気すぎます」の一句には、日本人としての思慮に欠けたことへの眼差しもあれば、「忠の精神」に対する懐疑もあるだろう。さらに、「支那の独立保全のため」の日露戦争に対する認識が動揺したに違いない。

日比谷焼打ち騒動は他の留学生にも衝撃を与えた。例えば、景梅

九はこの騒動で日本人の「国民意識」、「国家」観念が中国人よりはるかに進歩していると嘆いた。また、政治より勉強に専心している留学生黄尊三の『留学日記』には、次のように記されている。

日本人は日比谷で国民大会を開く。集まるもの数万人。日本は戦勝国なのに、日露講和条約において、イギリス・アメリカに邪魔されて権利を主張しなかつたので、国民は政府の無能を憤つて、この大会を開いた。講和に反対して、警察を焼き打ちし、警官を殺し、首相と小村講和全権の処分を天皇に要求して、人心恟恟。日本国民の気風は、本当に侮るわけにはいかぬ。感極まり、恥しさ、この上なし。<sup>20</sup>

日本語を勉強するため、新聞を読む習慣を身につけているので、黄のこの事件に対する認識も新聞に影響されたものが考えられる。ただ、「日本国民」が政府に抗議活動を行ったことに大いに感銘を受けたことが読み取れる。

『惜別』では、周さんは日露戦争における日本の勝利に刺激され、「日本には国体の実力といふものがある」と嘆いた。「私」はそれを「国体の自覚、天皇親政」につなげて「特筆大書」した。さらに、周さんは日本人の天皇への忠の精神を賛美した。しかし、夏休みの東京行きは「忠義の一元論」を考え直す契機となった。周さんは当時留学生の間に広がっていた三民主義や、日比谷焼打ち騒動で見た

日本国民の行動から大きな刺激を受けた。『惜別』の最後に、周さんは「私」に帰国の決意を打ち明けて、「いまのままでは、支那は永遠に真の独立国家としての荣誉を、確立する事が出来ない」ため、「精神の革新」、「国民性の改善」が必要だと述べた。それに続く「日本の忠義の一元論もこんなものではないかしら。さうだ。僕は、やつとあの哲学が体得できました」という周さんの言葉は、最初に議論された「忠の一元論」の意味とずれている。

中国が植民地化されつつある危機にさらされていたこの時期に、留学生は三民主義に訴えて、清王朝を打倒し、祖国を欧米列強の帝国主义から守る使命を負った。太宰は周さんと日本人学生との親和を書くより、周さんと他の留学生との距離感を示しつつも、同調していく姿勢を描き込んでいる。そこには、太宰の留学生に対する理解が見られ、時局への抵抗が読み取れよう。

### 三、「親和」のひび——津田憲治の意味

『惜別』の冒頭に新聞記者が老医師「私」を訪ね、「魯迅と藤野先生」の「日支親善の美談」を求める。その記者は地方の新聞に時局を反映した文章「日支親和の先駆」を載せる。「私」は「あのやうな社会的な、また政治的な意図をもつた読物は、あのやうな書き方をせざるを得ないのであらう」と理解を示すものの、「恩師と旧友

の面影を正す」ため、手記を執るようになった。つまり、「公的」記述に対して、「私的」記述を以て対抗する。そして、本文の前半で、「日本語不自由組」が結成されたかのように、周さんとの交友が書かれている。しかし、物語が進むにつれて、「周さん」と「日本人」の「親和」が軋んでいく。例えば、幻灯事件の後、「私」は「その頃の周さんの態度には、何か近づき難いものが感ぜられて、学校で顔を合はせても、互ひに少し笑」っただけと記している。これは無論、周さんの内面的な葛藤に関わる問題でもあるが、「この事件が、周さんの心にどんな衝動を与へたか、それは私にもわからない」とあるように、外部からの影響を見逃してはいけない。これに関しては、「周さんと私との交友の、最初の邪魔者」として登場した津田憲治の言論に注目すると、問題は一層はつきりと浮かび上がる。

「私」は最初周さんから津田憲治のことを聞かされた。やがて津田に呼びとめられ、「君、外国人とつき合ふには、よつぽど気を付けてもらはないと困るよ」と説教された。また、津田は「外交の妙訣」、「日本の外交方針」をしきりに口にする。

この時期の「外交方針」といえば、大きな騒動となった「文部省令第十九号／清国人ヲ入学セシムル公私立学校ニ関スル規程」が挙げられる。のちに「清国留学生取締規則」と呼ばれる該省令は一九



○五年一月に公布された。一五条のうち、最も問題になる第九条には、「選定ヲ受ケタル公立又ハ私立ノ学校ニ於テハ清国人生徒ヲシテ寄宿舎又ハ学校ノ監督ニ属スル下宿等ニ宿泊セシメ校外ノ取締ヲナスヘシ」とあり、第一〇条に「選定ヲ受ケタル公立又ハ私立ノ学校ハ他ノ学校ニ於テ性行不良ナルカ為退校ヲ命セラレタル清国人ヲ入学セシムルコトヲ得ス」とある。この省令の背景には、清国政府の要請を受けて留学生の反清活動を規制するという日論みがあった。それに留学生が反発して、問題の箇条の修正を求め、さらに省令の取り消しを要求するようになった。「東京朝日新聞」は「清国人同盟休校」(一九〇五・一二・七)の記事で、留学生の動きを報道している。留学生が省令をあまりに狭義的に解釈していると非難し、さらに、「清国人の特有性なる放縦卑劣の意志より出で団結も亦頗る薄弱のものなる」と民族性にまで言及している。そして、事態は二、三日中に収束すると推測している。

留学生は省令に反対する理由を新聞に投稿した。程家樞の「清国留学生取締規程に反対の理由 十二月七日午後草稿」である(『東京朝日新聞』一九〇五・一二・一〇)。程は留学生のリーダーであり、「東京朝日新聞」の記事への反論と見られる。「吾人」が省令に反対しているのは日本に留学している以上、日本の学生と同様に取扱い扱われるべきという主張によるもので、「其規程の如何に広義な

るも又如何に寛大なるも吾人の断じて服従する能はざる所以なり」と述べた。

さらに、事態に拍車をかけたのは陳天華の自殺事件であった。陳天華<sup>21)</sup>はやはり「東京朝日新聞」の記事に記されている清国人の「放縦卑劣」に衝撃を受けて、一月九日に海に身を投じた。この事件は留学生に大きな影響を与えた。吳玉章や景梅九は回想記で陳天華の自殺を記した。黄尊三はこのたび訃報が伝わると、留学界全体が感動した」と『留学日記』に綴った。

『惜別』では、津田は留学生のことを「清国から派遣された学生でありながら、清国政府の打倒をもくろんでゐる」と考えている。そして、「日本はいま国運を賭して、北方の強大国と戦争のまつさいちゆうだ。もし、清国政府が日本政府に対して悪感情を抱き、現在の好意的な中立の態度を放棄して逆に露西亞に傾いて行つたらどうなるか」、留学生に「ただの親切だけでは駄目」で、「一面親切、一面監視」の態度を以て臨むべきだという。津田の発言のタイムミングは「清国留学生取締規則」とややずれるが、この繰り返された「一面親切、一面監視」はまさに「清国留学生取締規則」の内実そのものをいう。

ここで、太宰は日本政府の「方針」を滑稽なものとして描いている。津田の言論は常に「国」、「政府」という「公的」性格を帯びて

いる。周さんを中傷する匿名の手紙をめぐって、彼は「これは国際問題だ」、手際よく扱わないと、「日支親善外交に、一大汚跡を、踏み残す事になる」と述べる。また、周さんが勉強を怠る時に津田は心配をかけたものの、「日本は、あいつに立派な学問を教へ込んでやつて帰国させなければ、清国政府に対して面目が無い」という。

この意味で、津田の存在は日本政府そのものを隠喩する。彼の介入で、親和物語にひびが入る。董炳月が津田憲治と太宰の本名津島修治との類似性を指摘している<sup>②</sup>。太宰が情報局と文学報国会の依頼で小説を書く行為と津田憲治の言論を重ねて考えると、太宰は自己戯画化をしながら津田を描いたといえよう。そこには、太宰が時局に協力する行為に対しての自己批判が込められている。

おわりに

『惜別』の冒頭では、明治末期の「親和」を時局のために引つ張り出そうとする新聞記者の動きが描かれている。語り手「私」の存在する時間は昭和であるが、物語世界は「四十年も昔の事」を回想したものである。そして、明治の話が終わって、「付記」をつけ、魯迅の「藤野先生」を引用して「自分（太宰）」に戻るといふ作品構造を採っている。作者はこのように巧妙に二つの時期をつなげている。

周さんが医学を諦め、中国に帰って雑誌を発刊することを「私」に告げたシーンで、次のような描写がある。

「どんな名前ですか？」「新生。」と一言、答へて微笑した。その笑ひには、周さん自ら称してゐたあの「奴隷の微笑」の如き卑屈の影は、みじんも見受けられなかつた。

興味深いことに、「日華学報」第九二号（一九四二・一一）の編集後記に、中国人留学生の様子が描かれている。

中国の留学生も変わった。その表情からは、混迷と自虐の翳は消え失せ、親和と確信の色に満ちて来た。東洋の素顔をとり戻しつゝある。われらは、かれらと共に歩む。新しい大東亜の栄光を領つて、彼らと共に前進する。

これは時局に巻き込まれた表現であり、全面的に信用してはいけないが、留学生は「親和」の表情で日本と共に進むと記されている。一方、『惜別』の題名にもあるように、周さんは「私たち」と共に歩まない。彼は藤野先生の「親切を裏切る」ことになつても帰国し、雑誌を作つて民衆を啓蒙することを決意する。このような描き方は時局とすれ違う方向に向かつている。

『惜別』では、新聞記者が「日支親善の美談」を求める様子が描かれる。その背景に、太平洋戦争前後、日本政府が留学生を「大東亜共栄圏建設の指導者」にさせるため、留学生と日本人との「親和」

を求めたことが考えられる。一方、「私」の綴った物語では、津田が政府の方針に従って外国人と接しているが、周さんは日本人とだんだん疎遠になって、最終的に「忠の一元論」を捨てて、中国自らの論理を信じるようになり、日本を去ってゆくというような「親和」が破綻した結末となる。太宰は明治末の親和物語の破綻を描いて、戦時下の「独立親和」のパロディーを作ったといえよう。

## 注

- ① 竹内好「藤野先生」(『近代文学』第二・三合併号、一九四七・二)、松木道子「太宰治『惜別』における魯迅受容のあり方」(熊本大学教育学部国文学会「国語国文研究と教育」第九号、一九八一・一)、山崎正純「太宰治と中国——『惜別』を中心に」(『国文学・解釈と教材の研究』第四四巻第七号、一九九九・上)などがある。
- ② 奥野健男「解説」(『惜別』新潮文庫所収、一九七三・五)、千葉正昭「太宰治と魯迅——『惜別』を中心として」(『国文学・解釈と鑑賞』第四八巻第九号、一九八三・六)、川村湊「『惜別』論——『大東亜親和』の幻」(『国文学・解釈と教材の研究』第三六巻第四号、一九九二・四)などがある。
- ③ 権錫永「時代の言説」と「非時代の言説」(『国語国文研究』第九六号、一九九四・九)、高橋秀太郎「太宰治『惜別』論」(『日本文芸論稿』第一五巻、一九九九・一〇)などがある。
- ④ これに関しては、『太宰治全集・二』(一九九九・三、筑摩書房)の「解題」で、「一九四四(昭和十九)年春頃に内閣情報局に提出するため執筆されたと推定される」と記されている。

- ⑤ 謝廷秀編『満州国学生日本留学拾周年史』(『留学生諸規定及統計』、二六四頁〜二六七頁(一九四二・九、満州国学生会中央事務所))
- ⑥ 河路由佳、淵野雄二郎、野本京子著『戦時体制下の農業教育と中国人留学生』一九三五—一九四四年の東京農林学校、第一部第二章・戦時体制下の在日留学生教育——政策とその教育現場における現れ、二九頁。本章の執筆者は河路由佳。(二〇〇三・一二、農林統計協会)
- ⑦ 江上芳郎「南方特別留学生招へい事業に関する研究(二四)——南方特別留学生名簿——」(『鹿兒島経大論集』第三五巻第一号、一九九四・四)
- ⑧ 実藤惠秀『中国留学生史談』あとがき、四四五頁〜四四六頁(一九八一・五、第一書房)
- ⑨ 五十嵐康夫「太宰治『惜別』の成立——さねとう・けいしゅう氏の著作を中心に」(『日本近代文学会会報』第五一号、一九八〇・三)
- ⑩ 留日浙江同郷会が一九〇三年二月一七日に東京で創刊した雑誌。全二期あり。
- ⑪ 中国語原題は『斯巴達之魂』である。
- ⑫ 厳安生『日本留学精神史』第四章・在日留学生と日露戦争、一七六頁(一九九二・一〇、岩波書店)
- ⑬ 呉玉章『呉玉章回憶録』第一章・从甲午战争到辛亥革命的回憶(拙訳・日清戦争から辛亥革命までの思い出、一九頁。中国語の原文は「直到一九〇四年二月日俄战争开始后、人们由于对沙俄的痛恨、还把同情寄予日本方面、听见日本打了胜仗、大家都很高兴」である。(一九七八・一一、北京・中国青年出版社) 呉玉章(一八七八〜一九六六)は一九〇三年〜一九一一年日本に留学。
- ⑭ 景梅九(一八八三〜一九六一)、中国山西省生まれ、アナキスト。一九〇三年〜一九〇八年日本に留学。

- ⑮ 一九二四年、北京国風日報社。本稿での引用は日本語訳『留日回顧』（大高巖、波多野太郎訳、一九六六・二二、平凡社）による。
- ⑯ 沈廸民「魯迅早年の活動点滴」（『上海文学』一九六一年第一〇期、一九六一・一〇）
- ⑰ 嚴安生『日本留学精神史』第四章：在日留学生と日露戦争、一八四頁～一八五頁、前掲
- ⑱ 中国語原題は『中山先生逝世后一周年』である。魯迅『魯迅全集・第七卷』（一九八一・一、北京・人民文学出版社）
- ⑲ 丸山昇「魯迅」第一章・いわゆる『寂寞』について——魯迅における辛亥革命——、四三頁（一九九四・五、平凡社）
- ⑳ 『留學日記』は黄尊三『三十年日記』（一九三三・一一、中国湖南印書館）の第一冊である。本稿での引用は実藤恵秀、佐藤三郎訳『清国人日本留學日記』第二章・弘文学院在學、四六頁～四七頁（一九八六・四、東方書店）による。黄尊三（一八八三～没年未詳）は一九〇五年～一九一二年日本に留學。
- ㉑ 陳天華（一八七五～一九〇五）、清末の革命家。著作に『猛回頭』、『警世鐘』、『獅子吼』などがある。
- ㉒ 董炳月『国民作家的立場』第五章・自画像中的他者——太宰治『惜別』研究（拙訳・自画像の中の他者——太宰治『惜別』研究）、二二三頁（二〇〇六・五、上海・生活・読書・三知書店）
- 〔附記〕 本稿で引用した『惜別』の本文は『太宰治全集・八』（一九九八・二、筑摩書房）を底本とした。引用に際しては、漢字は新漢字に改めた。ルビを適宜省略した。／は改行を示す。
- 本稿は二〇一三年一月一日日本近代文学会例会で口頭発表した内容に基づいて、加筆・修正を加えたものである。